
ネギま！ 殲滅眼と強欲をもつ槍兵

米

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ 殲滅眼と強欲をもつ槍兵

【Nコード】

N7142Y

【作者名】

米

【あらすじ】

二槍使い兼殲滅眼持ち兼鋼の錬金術師の強欲の能力持ちが頑張ります。

作者は文才ないどころではないです。

ただの自己満足小説です

プロローグ

こんにちは。

僕の名前は■■■■です。あ、スミマセン僕は死んだので前世の名前は喋れないようです。

ん？なにを言ってるかわからないって？今から説明しよう。

1・あれ、ここどこ？なんか真っ暗だな。

2・神（仮）登場。

「貴様は死んだ。が、それは僕のミスでな、極悪人に天罰を下すつもりがお主に下してしまっただ。すまんの」

よく分からないが俺は死んでそれはこいつのせいだと……よし！殺そう！

と、言う訳でいま足元に神（仮）が転がっています。

神「ぐふつ。ま、まあそう言うことだからお主を転生させることにした。そのさい3つ願いを叶えさせてやろう。あっ！スミマセン、威張らないから蹴らないで！」

なに威張ってるんだこいつ。

「まあいい。願い事か……俺が転生する世界はどんなところだ？」

神「魔法や気があり。殺し合いがある所です！サー！」

「それじゃあまずは、漫画伝説の勇者の伝説に出てくる殲滅眼と鋼の錬金術師の強欲の能力。あ、魔改造でその世界最強クラスの一撃でも防げるようにして。殲滅眼も魔改造で気も吸収出来るようにして。」

あと二十年の間ここで修行したいから誰かだしてくれ」

神「分かった。そうだな……」

デイルムツド・オディナなんてどうじゃ。ケルト神話に出てくる
槍兵のなかでも屈指の実力者じゃ」

「まあまさせる。

それと最後をお願いなんだが、俺の家族と兄弟と親を出来るだけ幸
福にしてくれないか？」

神「ふむ。せいぜい十が十一になるくらいたぞ？」

「構わない頼む。」

神「よかろう。お主はこの扉をの向こうにいるデイルムツド・
オディナの所にいけ」

「分かった。」

さあ。来世では死なないうよう頑張るか！

設定

人物 ライガット・オディナ

性別 男

身長 前世 185センチ転生後136センチ

能力 鋼の錬金術師の強欲の能力（魔改造）

伝説の勇者の伝説の殲滅眼（魔改造）

能力値 身体B - 耐久C -

俊敏B } EX

幸運E

宝具B -

【クラス別スキル】

対魔力：A +

ここでは殲滅眼により極限まで効かないとします。

【固有スキル】

心眼（真）：C 修行・鍛錬によって培った洞察力。窮地にお

いて自分の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す“戦闘論理”。チャンスを手繰り寄せられる宝具

『破魔の紅薔薇』
ゲイ・ジャルグ

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：2 } 4 最大捕捉：1人

—— 魔力による防御を無効化する長槍。

魔力によって編まれた防具はこの槍の攻撃に対し効果を持たず、

一切発揮されなくなる。

持っているのは限りなく本物に近い偽物で本物よりもろい。

契約や呪いは覆せない。

『必滅の黄薔薇』
ゲイ・ボウ

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：2 } 4 最大捕捉：1人

—— 回復不能の傷を負わせる呪いの槍。

この槍によるダメージはHPの上限そのものが削減されるため、
いかなる治癒魔術、再生能力をもつても『傷を負った状態』
にまでしか回復出来ない。

転生しました！……あれ？

あれから二十年。

師匠に鍛えられたいぶ強くなりました。（実はすでに本気のディ
 ルムッド・オディナといい勝負をするほど。つまり英雄なみ。）

「ディナ、貴様はもう十分強くなった。それゆえ、わが名である『オ
ディナ』を与えよう。」

「ありがとうございます、師匠。」

神「準備はいいな？おっと。忘れてた。餞別じゃ。受けとれ。」

これは！

「ゲイ・ボウとゲイ・ジャン又じゃないか! どうして?」

神「それは限りなく本物に近い偽物じゃ。本物よりはもろいが能力はほぼ同じじゃ。それではがんばってこい！」

「貴様の活躍、期待してるぞ！」

「はい！それでは！」

俺は扉を抜け、転生する。あれ

「また子供になるなら槍とかどうするのか？まあいつか。」

で、結果転生したのは

[illegible]

はい、分かります？ 人造人間として生まれました！ なんと
いうご都合主義！ 設定すべてこの人がつくったことになりました！
まあとにかくさっさとここからにげないとな。

「そこまでだ！警備団だおとなしくしろ！」

「くそ！しかしこいつがいれば！」

なんか考えて事してたらいろいろあり、解放されそうです。よし！向こうの人に保護してもらおう。

ガシャン！しゅううううううう

「くそ！気よつける。なにがくるか分からんぞ！」 「はは

ははははは！貴様らではこいつには勝てんよ。ははははははんぐつ！貴様な、何をしている敵は向こうだ！ま、まてやめろ！た、たすけギャーーーーー！」

取りあえず俺を作り上げたやつは気絶させた。え？ややこしいって？そこらへんはほら、作者の文才がね？

ま、まあこれで向こうの人にも敵意がないことを分かってくれないかね？

「こちらの言葉は分かるか？」

コク

「喋れるか？」

「少し……」

「何故あの人間を殺した？」

「何かあの人は企んでいたから。それに殺してない。気絶してるだけ。」

「そうか……ではついてこい皇帝陛下にご報告せねば」

「分かった。」

さてさて。どんな世界かな。

あ、二槍は俺だけが使える武器として俺を作り上げたやつがつくっていました。なにげすげえなあいつ。

二話

こんにちは。あの日から早一年、あの後警備団の方と一緒に皇帝に会い、騎士団に入って一緒に修行することになりました。どうやら自分が歴代最年少の騎士のようです。（パット見、五才です。）
とは言え、この身は我が師、デイルムッドに鍛えられ、殲滅眼やグリードの能力もあり、既にバグに近かったです。

「オーイ！オディナ！ちよつと此方こい！」

彼はムー。自分と一緒に皇帝に会った人です。ちなみに彼は亜人です。僕も亜人の長命種と言う人より長生きする種族だそうです。

「何？ムー。」

「お前がいつも使っている槍あるだろ？あれの持っている能力が騎士団としては欲しくてな、貸してくれないか？」

「いいよ。帝国には助けてもらった恩があるからね、協力するよ。」

「本当か？ありがとう！」

え？いいのかって？大丈夫。この前夢で神（仮）からお告げがあり、曰く

・槍は二本ともお前以外が触ると刺が生える

・殲滅眼は魔法のように外に放出するのは吸収できるか、身体強化の魔法や気は吸収出来ない。

とのことでした。

だからムーが触ると……

「いったああああ！」　こうなる訳で。

「どうやらこれは俺だけしか使えないみたいだね。」

「そ、そうか。」

まあとにかくムーと話したり修行してるといつの間にか他の騎士団の人が喋ったらしく、有名になったみたいで町にでると『最強の楯と殲滅の槍兵』などと長い二つ名で呼ばれ、そのたびにムー

がニヤニヤするから殴る（強欲の能力つき）ことを繰り返しています。

side ムー

こんにちは。ムーです。さてさてもうオディナと出会って一年がたったのか。早いな。いま俺とあいつは五才としがはなれているがまあ楽しく日々過ごしています。

「これ！ムー！オディナは何処じゃ？」

「あつ！テオドラ様。オディナなら今は多分訓練所ですよ。」

「分かったのじゃ。ふふふ、まっておれよオディナよ。今日こそ貴様を妾の騎士にしてみせるぞ！」

まったく、テオドラ様も頑張るな。それにしてもあいつもさつさと折れて護衛すればいいのに。

side テオドラ

妾が初めてあやつに会ったのは父上に連れられ騎士団の訓練所に来ていたときのことじゃ。

そこには二つの槍を操り、魔法を吸収しながら戦うオディナがおった。

妾はその槍兵の強さに惹かれたのだろう。とにかくあやつが欲しくなり、妾の騎士になるように言ったのだがなかなか首を縦にふらん。しまいには逃げ出すしまつ。何度も諦めようとしたが、その度に何故か胸が痛くなる。

むう。これもオディナのせいじゃ！絶対に妾の騎士にして一生妾のために働いて貰うぞ！

side オディナ

なんだ？いま寒気が。風邪かな？

「見つけたぞおおおおお！オディナああああ！」

げ！テオドラ様！

「お願いします。諦めて下さい！」

「いやじゃ！何故……何故そんなにいやがるのじゃ？」

「俺は帝国に恩がある。それを返すため、騎士団で頑張るんだ。」

「そうか。分かったのじゃ。ならば十歳になったら妾の護衛になってくれんか？」

「うゝゝん。分かりました。そうします。」

「そうか！では楽しみに待ってるぞ」

はあ。やっと解放される。

にしてもテオドラ様の護衛か……何だろう。なんだか嬉しいな。

よし！頑張るか！

3話

ライガットです。あれから五年たち、テオドラの護衛と言う名の騎士をしています。が、やっぱりこういう任務があるわけで……

「今日は三人か。少ないな。」

「しょうがないでしょい。騎士団が警戒を強化していてなかなか捕まえないですから。」

「まあいい。さっさと連れてくぞ。」

「りょーかい。」

最近増えている、子供を中心に誘拐しているグループの追跡をしています。あのようなゲスは嫌いです。と言うか嫌いじゃない人なんているんでしょうか？

上からの命令は拠点を見つけ次第騎士団に連絡。からのリーダーを残して殲滅し、事情を聞き次第リーダーも逮捕。と、いうものです。まあ客観的に見たら正しいけどさ、追跡する身もなつてよ。すぐに助けたいのに出来ないこの感じ。ほら、子供たちみんな逃げようともがいているよ？ホントいやだ。

と、追跡追跡つと。

と、言うわけで見つけたアジトに突撃し、ボスを見つけたのですが……………。

「本当だ雇われただけなんだ！俺たちだってやりたくてやっ
たんじゃないんだよ！」

こんなことほざいてます。どうしようこいつ。

「取りあえず雇主はどこにいる？」

「知らない。時々変な男がここに来て子供たちを連れてい
くだけなんだ。いつ来るかも分からないんだ！本当だ！」

うーん。どうしような。取りあえず上に報告しておくか……。

「なっ！貴様！ぐっ！」

うわ。仕込みナイフかよ。捕まえていたボスが仕込みナイフで
騎士団のロープを切ったみたいだ。

「くそ野郎が！殺してやる！“雷の暴風”！」

無詠唱魔法か。結構すごくない？こいつ。まあでも……。

「力を食らい……」

ギユウウウウン

「なっ！」

「それを放っ！」

ドゴー！

ボスを壁に押しつける。

「その目……お前、“殲滅”か！？」

「ちゃんと名前であってほしいな。ライガット・オディナ
だよ。」

「化け物め！」

「化け物で結構！我が主

を守るのなら化け物でも何とでも呼べばいい。」

ちなみに、俺の主はテオドラです。強引でもちゃんと忠誠を
誓ったからな。一度忠誠を誓ったら決して裏切らないし守り抜くけ
と師匠によく言われいたからな。

「にしてもまた収穫なしか。これで何度めだ？」

「そんなに誘拐グループ、がいたのか？ムー？」

「ああ。お前はテオドラ様の護衛だから任務から外されてい

たからな。でも、今回お前が選ばれたのも人手不足だからだぞ？」

「大変なんだな」

「まっ

たくだよ。最近は帝国と連合の関係も悪化しているし、もしかしたら戦争になるかもな。」

戦争か……。まあ俺が守る優先度は

テオドラ>>>皇帝陛下>ムーなどの友達>>>その他

だけだね。でもやっぱり

「戦争はないといいな。」

「同感だ」

ま、今はこの誘拐グループのボスを連行するか。

4話

こんにちは。ライガットです。

本当に始まりました、戦争。まあ戦争ですから、戦場に行けと言われるのも分かります。が……………。

「だめじゃ！ライガットは妾の騎士じゃ！戦場など絶対に行かせんぞ！」

我が主がずっとこんなことを言ってます。

「テオドラ様、私も友達のライガットは行かせた気ありません。しかし、ライガットの力は帝国一です。それが戦場に行くだけで味方の生存率が上がるのです！」

ムーが説得している。

「むう。ならばライガットはどうなのじゃ！戦場に行きたいのか？」

俺にふるか……………。

「自分は騎士です。あくまでもテオドラ様に従います。しかし自分が戦場に行けば味方の生存率が上がり、戦争が少しは早く終わる可能性があることを考えて下さい。」

自分としては出たい。いや、出なくてはいけないと思う。少しでも戦争を早く終わらせるために、少しでも生存率を上げるために。

「うう。分かったのじゃ。ただし、今から妾と仮契約するのじゃ。」

仮契約、新しい武器が手に入られるのは大歓迎だ。あれ？でも契約方法は……………。

「分かりました。では早速陣を書くので、その中でキスしてください（笑）。」

ヤッパリ！てか、（笑）てなんだ！

「う、うむ／＼」

「待ってください！テオドラ様そのようなことは本当に好きな人としてください！」

（うわっ。きずいてないよこいつ）

「い、いいから早くやるのじゃ！」

くそ！結局やるのか。そしてムー。そのニヤニヤをやめる！

「分かりましたよ。それではやりますよ／＼」

「ん……………」

パアアアアアアア

恥ずかしい……………。い、いや、今は出てきたカードを見よう。

「どんなのが来ました？」

ムーか。

「う、うむ／＼。これじゃ。」

なにに？称号は

『主を守る槍』

槍って人じゃなくね？槍兵または騎士、せめて人造人間がよかった。

イラストは…………。何だろう、これ。自分が真ん中で完全硬化した状態で、『ゲイ・ボウ』と『ゲイ・ジャルグ』を構え、その周りをまた『ゲイ・ボウ』と『ゲイ・ジャルグ』が何本も刺さっている。よく分かん。

「来れ『アデアット』」

…………。何も起きない。

「なあムー。こんなことってあるのか？」

「いや、俺も初めてだ」

どうしような。せめて戦場に行くまでには性能を知りたいけどな。

「も、もしかして妾とライガットは仮契約出来ないのか？」

……。涙目やめてください。罪悪感がかなり来ます。俺、悪くないよね！ムー何とかしてくれ！

「だ、大丈夫ですよ。ライガットいろいろ試そう。このイラストと同じ姿でもう一度してみろ。」

え〜と。完全硬化して……。

ズズズズズズズズ

槍を構えて

「来れ《アデアット》」

し〜〜〜〜ん

やめて！テオドラ様そんな今にも泣きそうな目でみないで！

「じ、じゃあ次は、……………そうだこの槍を想像しながらやってみろ！」

「分かった。…………来れ《アデアット》」来たアアアアア

！《ゲイ・ボウ》と《ゲイ・ジャルグ》が出てきた！つまり想像しながら唱えろと言うわけか。

「ありがとうございます、テオドラ様。これはこの二槍が出てくるようです。」

これは有難い。なんせ壊してもまた新しいのが出るのだ。もう自分に魔法はほとんど効かないだろう。

「…………ライガットよ」

テオドラ様が服を掴みながら話しかける。

「はい？」

「戻ってきてほしいのじゃ。なんでもするから、絶対に戻ってきてほしいのじゃ。」

そんなことか

「大丈夫ですよ。自分は死にません、無傷で帰ってきますよ。」

「絶対じゃぞ？」 「絶対です。」

「分かったのじゃ。待つとるからな？」

これは絶対に戻らないとな。

「はい。さあムー。行こうか。」

「ああ（ニヤニヤ）」

何にニヤニヤしてるんだ？気持ち悪い！

さてと、戦場に來たわけだが。敵はこの先か。

「ライガット様。準備整いました。いつでも行けます。」

「分かった。それじゃあ」

完全硬化をして槍を構える。

「全員俺に魔法を打った後敵にも魔法を打って突撃な。」

「は、はい！」

さてと、それじゃあ

「死ぬなよ、ムー。」

「あたぼうよ！」

……來た。味方の魔法だ。

「力を食らい……」

ギユウウウウウウ

（（（あれが殲滅眼……………。）（。）（）

「開戦だ！……………それを放つ！」

「「「雷の暴風」！」「」「」

味方の雷の暴風と共に一瞬で敵との距離をつめる。そして

.....。

「「「え?」「」」

周りにいた兵たちに槍を刺す。

「い、いつのまに!?!このやろう!」魔法の射手! 光の2

0矢!」

魔法は...

「力を食らい.....」

無意味だ!

ギョウウ

「「なっ!」」

「それを放つ!」

殲滅眼で更に身体強化して戦場を駆け

る。

こんな戦争、すぐに終わらせてやる!

5話

こんにちは。あの後いろいろな戦場で暴れていたら、何故か新たな名前をもらいました。『黒い槍兵』完全硬化していたからかな？『絶対防御』グリードと殲滅眼使えばねえ？『あの金色の槍と紅の槍マジチート。てか卑怯じゃね？』うん、名前じゃなくね？これ。

と、とにかくまた戦場に来ているライガットです。

今日の戦場はオスティア。今は戦艦の甲板にいて、連合と対峙しています。

「ムー殿。準備整いました。」

「分かった。」

ムーは俺と一緒に暴れたため、この艦の艦長になりました。

え？俺？俺はテオドラ様の護衛ですから。でも最近英雄なんて言われることがあります。そんなキャラじゃないのに。

「おい！ライガット！そろそろ出番だぞ。連合が砲撃してきた。」

あ！しまった！

「了解。力を食らい……」

ギユウウウウウウウン

「これは……『最強の楯』だ！『最強の楯』が来たぞ！」

「嘘だろ！？俺は死にたくないぞ！」

おお！殲滅眼使っただけでもう逃げ腰だ！まあ逃がさないけど。

「来れ《アベアット》。《ゲイ・ボウ》、《ゲイ・ジャルグ》
《！》」

ちなみに俺には空中戦が出来ないため《ゲイ・ボウ》と《ゲイ・ジャルグ》を投げつけてます。しかし、殲滅眼で身体強化するとヤバイです。あまりの速さに自分もあまり見えないですし、《

ゲイ・ボウ』の真名解放により、壊したら直せなく、全てエンジンを狙いさらに《ゲイ・ジャルグ》で障壁は意味を成さない。つまり防げない。いやあ、ほんとすごいね宝具は。お！精霊砲が王宮に直撃……え？無傷？

「艦長！王宮に打った精霊砲、全て無効になりました！これは……」

「黄昏の姫御子か……」

あ、マジックキャンセルか。ま、歴史だけの国だ、利用するのは当たり前だな。

「黄昏のは鬼神兵に任せろ。俺たちはその周りにいる雑魚をかた「鬼神兵全てやられました！」なに？どういう事だ？何がやった？」

「映像出します。」

そこには赤髪のカキと黒髪の剣士、ローブをかぶった魔法使いが鬼神兵を一発で倒していた。

「へえ。連合に鬼神兵を一人で倒せるやつがいたのか。」

「ライガット！そんなこといつてる場合か！あいつらは鬼神兵を一人で倒す奴等だぞ！お前が対処しろ。」

「了解。」

さて槍の雨を味わいな。

s a i d ナギ

おつす！俺は『千の呪文の男』のナギだ。今はオステシアで帝国の鬼神兵を倒してるぜ！

「にしても気に入らないな。なんで姫子ちゃんが戦争に利用されなきゃいけないんだよ！」

「オステシアは歴史だけの国ですからね。利用するしかないのでしょう。」

こいつはアル。まあ変態だ。だが、強い。ま、俺の方が強いけどな！

「おい！今は戦闘中だぞ！」

こいつは永春。ムツツリのサムライだ。

「いま変なこと考えなかったか？」

「いや？そんなことないぞ？」

「うそつけ！絶対へ……くっ！」

ドコー！

うお！いきなりなんだ？コレは槍？

「これは……いけません！『黒い槍兵』です！」

「なに！」

「ん？なんだ、その『黒い槍兵』って」

「ナギ。お前そんなことも知らないのか？黒い体をした槍兵だ。魔法、気、全てを吸収し、その黒い体はどんな攻撃でもキズつかないらしい。……くっ！」 また槍だ。

「それだけではありません。彼の恐らくはアーティファクトでしょうがそれは黄色の槍は決して癒せぬ傷を作り、紅の槍は魔法を無効化するそうです。」

まじ！？戦いたいな。

「どうやらあの艦から飛ばしているようですね。散開しながら近すぎましようこのままではやられてしまう。」

よっしゃー、最強の魔法使いの実力を見せてやる！

saidライガット

うーん。どうしような。俺は魔法は殲滅眼が吸収して使えないからそらとべないんだよね。つまり……

「掛かってこいや！『黒い槍兵』！」 あんなこと言われてもどうしようもないわけで。てか早いな。しかも広範囲殲滅魔法使えるみたいだし、空中じゃ分が悪いな。

「ムー。悪いけど撤退出来ないのか？分が悪い」

槍が当たんねえ。殲滅眼の効果も切れてきたし。

「仕方ないな。アイツらのせいで士気も低くなってきたし。空中はなあ。苦手だな。何とかしないとな。」

「こら、逃げるなあ！戦え！『黒い槍兵』！」

何か赤髪のガキが騒いでるな。あ！俺もガキだ！と、バカなことはしないで対策たてなきゃ。
はあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7142y/>

ネギま！ 殲滅眼と強欲をもつ槍兵

2011年12月17日21時47分発行